

函館生涯学習インストラクターの会

情報誌 平成24年度(第8号) 12月15日発行

会長 島貫 徹彦

編集責任者 浜田 愷

☆ネット情報 {報告・情報・連絡}

- ☆ 11月15日 月例研修会「経営実践論からの世相講談」講師 会員 井戸重利
- ☆ 11月16日 放課後子供教室(南本通小学校)
- ☆ 11月20日 24年度 ともえシニアカレッジ 開講
第1回講座 『明治期“国際結婚”した道南函館の女性』
講師 道南女性史研究会 代表 酒井嘉子氏
- ☆ 12月 7日 放課後子供教室(南本通小学校)
- ☆ 12月18日 24年度 ともえシニアカレッジ
第2回講座 『一緒に歌おう懐かしのフォークソング』
講師 むっくり横内とその七味
- ☆ 12月20日 月例研修会「折り紙」講師 会員 七尾佳佑
- ☆ 1月15日 24年度 ともえシニアカレッジ
第3回講座 『函館の古い地図を探る』
講師 ときどき雑学的少数市民 奥村茂樹

☆広場の声【自らの感じ、気づいたこと(随筆・旅行記・文芸)】



今日は何の日 その2

「十二月八日」

井戸重利

昭和16年のこの日「大日本帝国陸海軍ハ本八日未明西太平洋上ニ於テ英米両国ト戦闘状態ニ入レリ」と続く、真珠湾攻撃の戦果をラジオから聞いて興奮してきた。

そこで手元にあった資料から思いついた事を述べてみよう。

其の壱：開戦指令

大本営参謀本部から発せられた開戦指令「新高山登レ」である。

昭和16年11月26日、密かに択捉島は単冠湾から布哇に向け出航していた連合艦隊麾下の南雲中将率いる第一航空艦隊は、その進行洋上で開戦日指令暗号を受けるのである。

一方の陸軍にも大本営から、南方軍総指令官寺内大将に宛てた「日の出は山形」なる開戦指令が発信されている。

其の弐：奇襲成功の報

これは第一航空艦隊の旗艦赤城の通信士が受けた記録である。

赤城から飛び立った第一攻撃隊総指揮官淵田中佐は、上空からは全く無防備状態の真珠湾を眼下に見て、チョット拍子抜けしたように“おい！あれが真珠湾や”と同乗通信士（水木軍曹）に言った。

そしてハワイ時間午前7時49分（東京時間03:09）“よっしゃ行け！”とモールス信号のト・・・を連打し全機に攻撃命令を發した。

そして4分後、再び淵田中佐は叫んだ。“よっしゃ！トラ、トラ、トラや”

この發信の【ト・・・ ラ・・・】は機動艦隊司令部及び連合艦隊司令部とで予め打ち合わせていた奇襲成功の暗号であった。この電文は北太平洋上にいた旗艦赤城、更に広島湾上に停泊してい連合艦隊の期間長門でも、また東京の大本営でも同時にキャッチされている。

注1、トラトラトラ電文は「奇襲が成功した」という意味であって、その戦果の報告ではない。

注2、この時の第一次攻撃隊の編成は以下の通りであった。

戦闘機43機、水平爆撃機49機、急降下爆撃機51機、雷撃機40機等の合計183機

この総指揮官淵田美津夫中佐は、後の昭和20年9月2日ミズリー号艦上で行われた、我が国の降伏調印場に、日本代表重光外相付武官の一人として立会い、この戦争に於ける緒戦と再終結時、その想法に居合わせた稀有なる体験の持ち主である。

其の参：戦果の報告と我が方の損害

真珠湾攻撃の総隊長淵田中佐は、2波と3波と編隊機の攻撃指揮を取りながらも、空中に3時間も滞留していたが、この間敵側の砲撃は受けても迎撃機は1機も飛来してこなかった、と戦後書いた自叙伝の中で述べている。

米国側損害：撃沈艦4、撃沈戦艦4、撃沈巡洋艦3、その他艦船6、破壊海軍機188機、戦死行方不明者、2,334名、戦傷者1,023名

第一次攻撃隊の損害：未帰還飛行機及びその乗兵29機・55名、特殊潜航艇及びその乗兵5隻・9名

この奇襲作戦は、ルーズベルト大統領は予め知っていた。日本に先制攻撃させることによって、自国民に戦争参入を納得（欺き）させる巧妙な政治手法であった。

ハワイ攻撃の主力空母エンタープライズやレキシントン号は、予めメキシコの沖に避難しており、湾内にいたのは中古のオトリ艦隊であった。

日本側の失敗は、周辺に集積していた燃料タンクを一発の機銃弾で、炎上破壊が出来、その後の米国艦隊の太平洋進出をあと半年以上遅らせる事が出来たのにと、これは後年ハワイ観光に行ったとき現地案内人から聞いた話。

更に、5席の特殊潜航艇という海底忍者部隊があった、うち一人（酒巻少尉）が捕虜第1号となり、戦果はゼロであった。

然るに残りの9人は2階級特進の上、国家最高の論功行賞をうけ、さらに九軍神として国葬にもなっている。（この10人の隊長岩佐中佐の母は、その後も軍人の母として映画にもなり、全国の国民学校で上映され、俺等も観て感動した記憶がある。）

淵田中佐はこのとき海軍上層部から、今回の功績はこの9人に譲って呉と懇願（強制）され、空中戦で散った多くの部下たちの功績よりも、国家的プロパガンダには勝てぬと、断腸の思いで決断したと、後に自叙伝の中で述べている。

今はむかしの話である。

編集注記：上記については、スペースの関係上内容を損なわない範囲で原文の一部省略し、また、其の巻、式、参とも参考資料として、電文のコピーが添付されておりますが、不鮮明のため印刷できませんでした。ご覧になりたい方はお申し出ください。（浜田）